

Title	25 : 東京歯科大学口腔がんセンターの顎顔面補綴外来における歯科衛生士の関わり
Author(s)	多比良, 祐子; 綿引, 美香; 土屋, 佳織; 大屋, 朋子; 雨宮, 智美; 三條, 沙代; 小島, 沙織; 合原, 愛; 馬場, 里奈; 藤平, 弘子; 萩尾, 美樹; 吉田, 佳史; 三條, 介; 野口, 沙希; 齊藤, 朋愛; 佐藤, 一道; 石崎, 憲; 山内, 智博; 片倉, 朗; 高野, 正行; 柴原, 孝彦; 高野, 伸夫
Journal	歯科学報, 113(4): 435-435
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/3141">http://hdl.handle.net/10130/3141</a>
Right	

No.25：東京歯科大学口腔がんセンターの顎顔面補綴外来における歯科衛生士の関わり

多比良祐子<sup>1)</sup>，綿引美香<sup>2)</sup>，土屋佳織<sup>2)</sup>，大屋朋子<sup>2)</sup>，雨宮智美<sup>2)</sup>，三條沙代<sup>2)</sup>，小島沙織<sup>2)</sup>，  
合原 愛<sup>2)</sup>，馬場里奈<sup>2)</sup>，藤平弘子<sup>2)</sup>，萩尾美樹<sup>3)</sup>，吉田佳史<sup>4)</sup>，三條祐介<sup>4)</sup>，野口沙希<sup>4)</sup>，  
齊藤朋愛<sup>4)</sup>，佐藤一道<sup>1)</sup>，石崎 憲<sup>1)3)</sup>，山内智博<sup>1)</sup>，片倉 朗<sup>1)4)</sup>，高野正行<sup>1)5)</sup>，柴原孝彦<sup>1)5)</sup>，  
高野伸夫<sup>1)</sup>（東歯大・口腔がんセンター）<sup>1)</sup>（東歯大・市病・歯科口外）<sup>2)</sup>  
（東歯大・有床義歯補綴）<sup>3)</sup>（東歯大・オーラルメディスン口外）<sup>4)</sup>（東歯大・口外）<sup>5)</sup>

**目的：**口腔がんに対する治療法は、手術療法、放射線療法、化学療法がある。手術療法や放射線療法は、当該部の欠損・変形を招来し、重篤な機能障害をもたらすことがある。これらの口腔がん治療後の機能障害はQOL低下に直結し、患者にとって深刻な問題の一つとなる。東京歯科大学市川総合病院では2006年4月に口腔がん治療に特化した施設として東京歯科大学口腔がんセンター（以下、当センター）を開設し、2011年10月より当センター内において口腔がん治療の支持療法として、顎顔面補綴治療を開始した。かかりつけ歯科をもたない症例、またかかりつけ歯科医からの依頼があった口腔がん治療後の補綴症例を対象としている。今回、顎顔面補綴外来における、手術療法後の患者への歯科衛生士の関わりについて検討を行った。

**方法：**当センターの歯科衛生士は手術療法が選択された患者に対し、術前・術中・術後口腔機能管理として、術前に、専門的口腔衛生処置とブラッシング指導を行い、術後には全身状態を確認しながら、創部と残存歯に対する専門的口腔衛生処置を行った。それと平

行し診察介助、歯科医師には食事の摂取状態や義歯の適合の良否など情報の報告、患者には義歯の清掃指導・着脱の指導を継続して行った。

**結果および考察：**顎補綴装置は通常の義歯と比較し、形態が複雑になる、クラスプが多くなる、鼻筋との交通がある場合は汚染しやすい等の理由から、より細やかな義歯清掃指導が必要になった。また、残存歯には顎補綴装置を装着することにより力学的負担が大きくなるため、専門的口腔衛生処置とブラッシング指導が非常に重要な処置となった。また、口腔がんの手術療法後の患者は、がんに対する不安に加え、術後発生する機能障害に起因した精神的ストレスも多いとされる。顎顔面補綴治療の目的には、機能、審美の改善や残存組織の保護のみならず、心理・精神的治療効果も含まれる。当センターでは初診時から、歯科衛生士も担当として関わり、センター内において最も患者との接触時間の多い治療チームの一員となっている。そのため、診察介助や指導の他、特に顎顔面補綴外来での患者心理に対する配慮はさらに重要であることが再確認された。

No.26：市川総合病院での歯科・口腔外科と皮膚科の共同による「粘膜疾患外来」の開設

三島倫太郎<sup>1)</sup>，浮地賢一郎<sup>1)</sup>，井口直彦<sup>1)</sup>，高橋慎一<sup>2)</sup>，片倉 朗<sup>1)</sup>  
（東歯大・オーラルメディスン口外）<sup>1)</sup>（東歯大・市病・皮膚科）<sup>2)</sup>

**目的：**平成25年2月28日、難治性の口腔粘膜疾患を局所にこだわらず、大局的に診断・治療することを目的とした粘膜疾患外来を、東京歯科大学市川総合病院歯科・口腔外科と皮膚科が共同して開設した。一つの診察室で歯科医師と皮膚科医師が同時に診察を行い診断と治療をする専門外来は日本で市川総合病院が初めてである。今回、粘膜疾患外来を受診した患者の臨床統計と各症例の外来導入後の経過を解析し、今後の方向性について検討した。

**方法：**平成25年2月28日から同年8月29日までの約6ヶ月間に粘膜疾患外来を初診で受診した患者を対象とした。調査項目は(社)日本口腔外科学会調査企画委員会が作成した実績調査票に準じて集計した。

**結果：**患者数は34人、男性9人(26%)、女性25人(74%)であった。年齢分布は22歳から87歳まで、平均年齢は64.4歳であった。70歳代が約38%で、65歳以上は約68%を占めた。受診経路は、2科の併診から移行したケースが68%を占め、歯科・口腔外科からの紹介が26%、皮膚科からの紹介が6%であった。疾患別では、扁平苔癬が約38%、尋常性天疱瘡が約29%、類天疱瘡が約21%であった。

粘膜外来導入後は8症例に改善が得られた。全身

療法の導入によるものは2症例、局所療法の工夫・変更によるものが4症例であった。また、悪性転化を早期発見できた症例が1例あった。改善した症例には、扁平苔癬にカンジダ症の併発が見つかり改善した症例、扁平苔癬の原因として薬剤を疑い主治医に対診し、薬剤を変更し改善した症例、義歯の調整により改善した症例、スプリントを応用しステロイドの局所塗布を行い症状が改善した症例などがあった。

**考察：**粘膜疾患外来の開設から5ヶ月しか経過していないので未だ症例数は少ない。しかし、それぞれの専門的視点で共同に診察することで新たな症状、原因の発見や治療の試みがなされている。この外来では、自己免疫疾患を始めとした難治性の病変に対し、皮膚科医から口腔内症状に対する鑑別診断、検査や治療のアドバイスをする一方、同時に歯科・口腔外科医からは義歯の調節、歯周病の管理などの局所管理を行うことにより軽快した症例が認められた。超高齢社会において難治性の粘膜疾患が増加することが予想され、歯科と医科の連携した当外来のような共同診療の必要性が高まると考えられた。